

令和元年度 大阪国税局長賞

私に託されたバトン

智辯学園奈良カレッジ中学部 三年 湯本 紗和

「この教科書は、これからの日本を担うみなさんへの期待をこめ、税金によって無償で支給されています。大切に使いましょう。」

これは小・中学生に馴染みのある文章でしょう。小学校低学年の時分は、配布された教科書に記されたこの文章にしっかりと目を通しながらも意味をはっきりと理解せずに学習してしまっていた。中学三年生になり、手に取った高校内容の教科書には今までのように見慣れた文章が無かった。その時、改めてあの文章に込められた「ありがたさ」や「感謝の気持ち」といった意味を汲み取れたような気がした。

教科書が無償である裏には、納税者がひたむきに働いたお金を税金として納める人々の姿があります。互いに認知している人たちだけでなく、顔も素性も知らない人々も私という人間を取り巻き、見えないところで支えてくれているのです。文部科学省によると、義務教育教科書購入費等として約四百四十八億円という膨大な費用がかかっているそうです。決して安くはないお金をたくさんの方が私たちの未来への投資という形で学びを与えてくださっているのです。

また、私たちが受け取っているものは教育費に限ったことではありません。医療費の負担、街づくり、警察、福祉、ごみ処理等、私たちが不自由なく生活していく上で必要となる公共物にも税金によって賄われています。今年の十月から消費税が八パーセントから十パーセントへと増税されます。聞こえてくる賛否両論の声が世論を二分しているように感じます。確かに、消費者にとって増税は家計に大きな痛手を与えるものなのかもしれないです。しかし、先述の通り、納められた税金によって、私たちの暮らしに多大なる「便利さ」を享けているのです。「便利さ」を当たり前だと思わずに、良い環境をつくってくれた税金に感謝できるようになれば、税金への否定的な考えは生まれなくなるのでしょうか。国民一人一人が税金についての知識、税金による私たちの生活への恩恵を認知し、更に関心を持つべきだと思います。

今年で義務教育は終了し、数年後には納税者として、新たな世界へと踏み出します。私をここまで育ててくれた、私を取り巻くすべての人のことを、これからは私が支えられるように、恩返しができるように。私に託されたバトンが次の世代、更に次の世代へと途切れることなくつながるように。

「この教科書は、これからの日本を担う皆さんへの期待をこめ、税金によって無償で支給されています。大切に使いましょう」

私にバトンを託してくれたこの文章の期待に応えられるよう、立派な人間へと成長していきたいです。